

Title	エーリッヒ・フロム著『マルクスの間概念』(附 T・B・ポットモア訳『マルクス・経済学・哲学手稿』), R・C・タッカー著『カール・マルクスにおける哲学と神話』
Sub Title	Erich Fromm : Marx's concept of man, Robert C. Tucker : Philosophy and myth in Karl Marx
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.8 (1962. 8) ,p.107- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620815-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の児童福祉法及びその改正法案があれば、一層便利であつたと思われ。しかし、それ以上に、巻末附録として、更に実に詳細な各国の文献が整理されてつづ、この意味では大へん貴重である。

ごつごつながら、マニフェスト刑事事務叢書は次の内容である。

- I Penal Reform in England.
- II Mental Abnormality and Crime.
- III Modern Prison System of India.
- IV Modern Approach to Criminal Law.
- V After-Conduct of Discharged Offenders.
- VI An Introduction to the Criminal Law in Australia.
- VII Detention in Remand Homes.
- VIII Mens Rea in Statutory Offences.
- IX Sexual Offences.
- X The Results of Probation.
- XI The Detection of Secret Homicide.
- XII Juvenile Justice.
- XIII Attendance Centres.
- XIV Robbery in London.
- XV Judicial Attitudes in Sentencing.

(宮沢浩一・坂田 仁)

紹介と批評

Erich Fromm:

Marx's Concept of Man

with a translation from Marx's Economic and

Philosophical Manuscripts, by T. B. Bottomore

New York, Frederick Ungar Publishing Co.,

1961, x + 260 pp.

Robert C. Tucker:

Philosophy and Myth in Karl Marx

New York, Cambridge University Press, 1961, 263 pp.

ヘーリッヒ・フロム著

『マルクスの人間概念』

(附 T・B・ホットキョマ訳『マルクス・経済学・哲学手稿』)

R・C・タッカー著

『カール・マルクスにおける哲学と神話』

遅ればせながら、アメリカにおいても、マルクスの思想的なメニ
スと対決するために、これまでの《偏見》を棄却し、あらためてマ

ルクスの思想的ゲネシスに照明をあてようとする研究があらわれはじめた。このようなマルクス主義研究は、マルクスの初期的作品を通して、Eece homo ばりのマルクス像の復元を企図している。ここに取りあげた二つの書も、一八四四年のマルクスの遺稿『経済学・哲学手稿』を中心とし、マルクス主義に対する内在的批判を試みたものである。

フロムの『マルクスの人間概念』は、フロム個人として、マルクスの経済学的・社会学的思考に関しては不賛成であるけれども、かれのヒューマニスト的実存主義に関するかぎり、一貫してマルクスの讚美に流れている。フロムによれば、アメリカにおいてとくにはなほだしいマルクスに対する誤解と歪曲を生んだ理由として、第一、にもつとも明白なことは無知であつたこと、これはむしろ、『手稿』が今日まで完全に英訳されなかつたことに起因するが、それだけが充分な理由ではない。『ドイツ・イデオロギー』その他からも、マルクスの哲学的思想をうかがい知れるはずだからである。第二に、ロシア・コミニストの理論と実践がマルクスの理念そのものと同じ視されたばかりでなく、かれの資本主義批判があまりに唯物論的・経済学的カテゴリーで解釈されすぎたきらいがある。第三は、より非合理的な理由からであるが、ソヴェトの現実を悪魔的化身であるかのように、スターリン主義のテロと非人間性に熱つばい道徳的憤怒

を向けてきたことによるのである。

それに対して、フロムは『手稿』のうちに人間疎外の中心的テーマをたぐりながら、マルクスの目的を個人としての人間解放、疎外の克服にあるとし、マルクスの人間学、解釈の核心を明るみに出す。人間対自然の基礎的關係における『労働』の自己創造的行為は、資本主義の生産關係においては、疎外された労働、非人間化としてあらわれる。『資本』と『労働』という存在構造は、たんなる経済学的カテゴリーではなく、ヒューマニスティックな価値判断を内在化せしめた人間学的カテゴリーである。全的人間としてのプロレタリアートの解放とは、人間が人間としての本質に還帰することである。このように、「マルクスのヴィジョンは、人間に対する信仰、歴史のなかに展開された人間の本質の固有な、そして真実の可能性に対する信仰にもとづいている。かれは、社会主義を人間的自由と創造力の条件として眺めていたが、それ自体で人間生活の目標を構成するものとみなしていたのではない」(六一頁)。

『手稿』における『若きマルクス』は、円熟した後期の『老いたマルクス』と矛盾しているのであろうか。フロムは、前者を拒否しようとする立場——ソヴェト・コミニストの正統的解釈——に強く反対し、全体としてのマルクスを把握して、思想発展の連続性を強調する。たしかに、後期の作品は宗教や観念論の臭いをかぎつけら

れるような言葉に対してアレルギー的であつたことは認められるとしても、マルクスのヒューマニズムの哲学、人間疎外の理念は、経済学批判というかたちで具体化されたのだといわれる。だが最後にいたつて、フロムの「マルクスの人間概念」アブローチは、マルクスの人間内部に立ちいつて、夫人イェンニーとの結婚生活、娘エリナーの語る父性愛、エンゲルスとの友情によつて、マルクスのパーソナリティを描く。それは、傲慢であり、孤独であり、権威主義的であると考えられがちな誤解をとくに役立つけれども、主観的に、マルクスがどのようなパーソナリティであろうと、客観的思想との対応——もちろん無縁であることはないが——を探りあてることは、精神分析的手法の悪癖である。もつとも、フロム自身そのような行き過ぎを犯しているわけではないけれども。

タツカーの『カール・マルクスにおける哲学と神話』もまた、二つのマルクス主義をめぐる推理小説めいた謎を、『手稿』を手がかりとしながらといてゆく。タツカーはフロムより一層精緻な哲学的分析によつて、結論的には、オリジナナルなマルクス主義（『手稿』において定在化した）と成熟したマルクス主義とのあいだに、本質的には、変化における連続性を見透し、哲学から神話への超越をあきらかにしている。かれの方法は、『自己疎外』概念を、すぐれて神経症的パーソナリティに特徴的なものとし、人間の自己同一化の喪失

と絶対的自我的現実化との内的・心理的葛藤状況として把えていゝる。それは精神分析的方法ではなく、むしろマルクスの方法自体に精神分析の自我構造をえぐりだしている。神経症的パーソナリティは、すでにゲーテのファウストの人間のうちに文学的形象をとつてあらわされたが、それはカントからヘーゲルにいたるドイツ哲学に連続的にあらわれ、ヘーゲルを裏返したマルクスにも哲学的に連続しているのである。マルクスが『手稿』を素描するまでの系譜をくわしく跡づけながら、タツカーは、かれのマルクス主義の創造がヘーゲル主義の哲学的派生であること、それゆゑ、かれがその哲学的結びつきを隠秘するために、『手稿』を公刊したくなかつたといふ不在証明を認めるのである。

ヘーゲルの意味において、人間とは自己疎外における《神》である。そして、歴史とは、神が自己を認識する方法であると同時に、神が自己を現実化する過程にはかならない。人間、神、歴史のダイアレクティクスのヘーゲルの調和の世界は、かれの死後まもなくして、青年ヘーゲル学徒によつて解体されてゆく。批判の焰は、まさしくフォイエルバッハによつて燃えさかり、神とは自己疎外における《人間》であるという逆理をもつて、人間が人間となる人間学的主張にとつて代られる。こうしてマルクスにとつては、ヘーゲル的な Geist ではなく、フォイエルバッハ的な Mensch が問題と

なり、もはや *Übermensch* ではなくて、現実世界の *Urmensch* の状況を変革することが使命とされる。しかしながら、フォイエルバッハとマルクスは、それぞれ宗教と経済とをヘーゲル主義によつてヘーゲル化したのであつた。古典経済学から経済学的諸概念をとつてきたマルクスは、その体系的構想のアイデアを「精神現象学」から借りている。かれ自身の言葉でいえば、「ヘーゲルは近代国民経済学の立場にたつている」。⁽³⁾ 自己疎外された精神の思想的生産活動は、マルクスによつて、自己疎外された労働の経済的生産活動へと転形された。

ところで、タッカーによれば、マルクスの理解し描出した《現実》は、自己疎外的人間の《内的現実》の自己投射である。自我体系における葛藤のドラマが社会的ドラマへうつし変えられているにすぎない。『手稿』においては、人間はその労働過程で、労働の対象化、外在化によつて、かえつてますます疎外された労働としてあらわれ、他方で、人間の利己的欲望は貨幣の非人間的権力に支配され、貨幣によつて人間を絶対化せざるをえなくなり、ますます非人間化され、疎外される。その意味で、プロレタリアートとブルジョワジーとはともに非人間的である。むろんマルクスは、生産者としてのプロレタリアートに人間の本質を、貨幣の非人間的権力をパーソナライズしたものをブルジョワジーにみている。だが、かれのコミュニ

ズムとは *Selbstentfremdung* から *Selbstgewinnung* への自己還帰であり、「人間とその *alter ego* である客観的世界との自我関係における美学的コミュニティーの確立を意味している」(二五九頁)。

後期マルクスにおいては、自己疎外の心理的側面が清算されて、社会学化されたように見受けられるが、《労働の分業》あるいは《階級対立》といつてもターミノロジーの変化だけである。マルクスは同じテーマをさまざまに表現するアイスキュロスやシェークスピアと同じ作家である。『資本論』はヘーゲル主義のリフレインであり、その見事な論理的帰結である。それは、貨幣⇨資本⇨世俗的神の神学にはかならず、経済学批判の方法は、またフォイエルバッハの宗教批判とアナロジーである。すなわち、神のイメーじのうち人間自己疎外、精神的資本の蓄積をみるように、資本の蓄積過程、そして剰余価値の増殖過程 (*Verwertungsprozess*) を自己疎外の経済学として「資本と労働の世界」のうちに描いている。しかもここで、ヘーゲルの認識的状况において、精神の自己認識が無限に自己拡大をとげてゆく《認識論的全体主義》が、資本が絶対的富へと自己拡大をとげてゆく資本主義的生産過程における《貨幣的全体主義》という姿に変身しているのである。

「真に神話的思考というものの特徴のひとつは、思想家がそれを神話的と意識してないことである。その思想家にとつては、神話的思

考こそ經驗的にあるところのものを啓示化する。神話が外的過程として描写する内的過程は、外的世界に生起しつつあると実際に認識されるのである。神話は、外部の現実のまつたく直接的、感覺的表象として、心的ヴィジョンの領域を充す」(二二四頁)。マルクスの經濟学的諸研究は、おびただしい事實的資料の引用で充たされているけれども、それらは、マルクスの神話的ヴィジョンを現実的であるかのごとく見せかけるイリュージョンでしかない。タッカーは、マルクス主義がその後の歴史的事実によつて《退化》したという見解を、皮相な、ある意味で誤つたものであるという。なぜなら、それは、マルクスの理論が、かれの時代の經濟現象を説明し、アクチュアルな社会的世界を記述したものであるという前提において誤つてゐるからである。哲学的に評価すれば、マルクスは歴史の進行によつて退化させられた社会科学者ではなく、「ヘーゲルを逆転して、主觀的過程を社会的世界として表象した神話づくりとなつた哲學者であつた。この理由からすれば、マルクス主義は、社会学的にいえば、最初から《退化》してゐた……」(二二七頁)。神話であるがゆゑに誤りであつても、神話であればこそ、マルクス主義は、それ自体で神話的ヴィジョンを提示することができ、実践的行動と直接的に關連する。しかしながら、まさにこの点で、マルクスは自己疎外を人間対人間の闘争に分裂させ、他者を破壊する破壊的情念をさら

けだす結果にみちびいてしまつた。それは解決をもたらさぬせの解決であり、道德的逃避主義である。

タッカー(フロムにしてもそうであるが)は、もはや科学的、社会主義としてのマルクス主義を問題にしていない。神話に科学的妥当性を問ふこと自体無意味であり、それゆゑに、科学以外の意味が問われねばならないわけであらう。(4)かれの分析はマルクス主義にひとつの可能な理解をあたえるであらうが、この種のマルクス主義研究は、マルクス主義になにを問いかけるか、問いかける者の問題《意識》をつねに問うてみる必要がある。たしかに、タッカーはマルクス主義が神話であることを鮮明に示したが、マルクス主義者は、神話であるがゆゑにマルクス主義を信じているのではなく、逆に科学であるがゆゑにそれを信じている。マルクス主義者に向つて、かれのイデオロギーの呪縛性を訴えたところで、遠吠えを聞くような空しさを残すばかりであらう。

(1) 初期マルクス主義研究は、一九三二年、『経済学・哲学手稿』がドイツで刊行されて以来、西欧においてさかんにおこなわれ、とくに過去十五年間、ドイツとフランスには、マルクス研究のルネッサンスを捲きおこしたほどである。アメリカにおいては、Herbert Marcuse, *Reason and Revolution*, New York, Humanities Press, 1954 年、Rayz Dunayevskaya, *Marxism and Freedom*, with a Preface by Herbert Marcuse, New York, Bookman Associates, 1958 年、

てマルクス主義研究に新しい認識視角が開かれた。わが国でも『手稿』はすでにマルクス・エンゲルス選集(大月書店刊)に収められ、外国の重要文献もいくつか翻訳されている。たとえば、マルクラーゼの『理性と革命』(岩波書店)、同『初期マルクス研究』(未來社)およびG・ルカッチ『若きマルクス』(ミネルヴァ書房)など。

(2) マルクスのヒューマンイズムを復活させたルカッチの前掲書は、ナチから逃れて一九三四年ロシアに亡命したとき、ソヴェト共産党からの厳しい攻撃にあつて、誤りを告白させられ、修正を余儀なくされたといわれる(フロム、七〇頁)。

(3) マルクス『手稿』邦訳、四〇四頁。

(4) このような傾向的解釈として、最近アメリカでは、マルクス主義のダイナミックスを工業化過程におけるイデオロギー的対応として捉えようとする試みがなされている。とくにこのようなアプローチは、非西欧的世界におけるマルクス主義の問題状況としてクロースマップされてきた。たとえば、Adam B. Uiam, *The Unfinished Revolution: An Essay on the Sources of Influence of Marxism and Communism*, New York, Random House, 1960. の問題が関して、近いうちにわたくしは、『工業化過程におけるマルクス主義の動態』と題して論文を発表する予定である。

(奈良和重)